白金薮

11月号

祝富士山百句

平成２９年１１月発行　　第８１号

白金葭定例句会案内（於て　アビスタ）

十二月十五日（金）三時第五兼題：マスク、人参
一月十五日（金）正午～三時第五兼題：新年一般
二月十六日（金）正午～三時第五兼題：針供養、黄梅

兼題句参考句十二月十五日分　マスク、人参）

眼はうごき眉はしづかにマスクの上　誓子
マスクして我と汝でありしかな　虚子
つき添ひの母の特大マスクかな　指澤紀子
ピカソ展マスクの僧とすれ違ふ　藤井寿江子
人参の掘り出してある夕日かな　大串章
人参を間引く夜明を待ちきれず　三輪浅茅
にんじんが赤し主婦等に陽あたる坂　飴山　實

月例句会報（'17／11／17　9名欠4　石蕗の花、木の葉）

石蕗の花日向の国の鵜戸神宮　光成高志
払暁のオリオン発し星流る
頬と脚黄金きんの光や豊の秋（救世観音像）
颯と降る木の葉の時雨瀞の上
咲き過ぎて小町の果ての石蕗の花
木の葉散りゆく溜め息のリズムにて　増田陽一
海辺の墓地帰り来る石蕗明り
蝶になれるか寒月光の幼虫たち
老年の果の幼年昼の虫
荒宅や郁子の実百が窗を打つ

石蕗の黄の一茎つぶら一葉忌　飯田孝三
天皇も妃も老いぬ石蕗の庭
肩にふる木の葉がかさと古書店街
耳うごく木の葉ふる毎神馬の
手賀沼や河童の渚木の葉飛ぶ

神の留守巫女出て道を教えくれ　松村幸一
石蕗咲くや効き目の遠き稽古事
思ふこと冬支度より死支度
鵙や冬興亡戦史の国府台
女湯に声して千住ばせをの忌

旋風木の葉取り込むビルの下
切り花もなく咲くだけの石蕗の花
木の葉降るブリキの屋根の鶏小屋に
冬の蝶飛鳥時代の透彫
木の葉雨北へ傾るゝ風に乗り

光　みち

山茶花の垣に幼きピアノの音
木の葉舞ふ砂場に遊ぶ子の上に
コスモスのゆれて園児のさようなら
清め塩ともにかゝりて石蕗の花
病院の窓に夫ゐる鰯雲

吉羽多美子

女らと居りてもひとり木の葉道
青蜜柑一つ供へて馬の墓
額縁に余りし冬のヴィクトワール山（ポール・セザンヌ）
鯖サンドイッチ頬張ってをり秋の旅
手袋に赤を選びぬ誕生日

倉田紀子

同期会後期高齢石蕗の花
石蕗の花色うせし庭明るうす
壁を這ふ木の葉色づき一葉散る
裏庭に日の廻りきて枇杷の花
カーテン開け差し込む光十三夜

浅野正美

寒月や手賀沼の水面きらめけり
石蕗の一輪光る谷（やと）の奥
柿むいて正岡子規を読み返す
冬の日や芦間に青鷺身をひそめ
散りまがふ木の葉浴びつつ観覧車

武者昭七

病窓や枯蓮見舟橋潜る
鞦韆の少女の髪に降る木の葉
病んで聴くラジオの「枯葉」胸に散る
涸沼暮れ橋上尾燈湧くごとし
メダカ棲む大壺に添ふ石蕗の花

磯目健二

十夜婆とろりと数珠を揉みながら
石蕗の花八百屋お七は只哀れ
田仕舞の煙の中に立ち尽す
キャンパスの木の葉一枚失敬す
晩節の身辺整理小六月

佐藤宏之助

石蕗の花夕日あつめてゐたりけり
かけのぼる木の葉もありて尾道は
渦巻くはゴッホの叫び木の葉散る
公園の空のひろびろ冬はじめ
大道芸かこむ喚声冬ぬくし

仲本興正

白嫁菜林の向こう高きビル
木の葉降る日曜画家のベレー帽
清澄の石蕗の花咲く石の庭
ビルに囲まれでも真青な秋の空
飛び石をゆつくり渡る石蕗の花

田宮敦子

一句鑑賞

光成高志

木の葉散りゆく溜め息のリズムにて　陽一

木の葉がさあっと散り行き、しばらくして又さっと散ってゆく。溜息の間隔に似て、いやこれは溜息のリズムそのものだと自得している句でしょう。寂しさと切なさにおそわれた時や嗚呼あれと感嘆した時とか、臨終の時も大きな溜息がでるそうですが、リズムがある溜息はやはり、前者の時でしょう。

渦巻くはゴッホの叫び木の葉散る　興正

「渦巻くは」はゴッホの星月夜の絵を指しているに違いない。糸杉と村の副題がついているが、興正さんは次のゴッホ展句会に来られないので、すでに観られていち早く投句されたようです。星月夜の渦を巻く暗雲やその中で光を放つ月の表現は観る者をぎょっとさせるし、陽一さんの句のような溜息がでる作品です。ゴッホの叫びと断定した興正さんは「木の葉散る」でその死を象徴させたのだと思います。

十夜婆とろりと数珠を揉みながら　宏之助

十夜法要に参列した老婆が引声（いんじょう）念仏を数珠を揉みながらとろりとろりとした夢心地で聴いている情景です。炭俵の「方々に十夜の内のかねの音」（芭蕉）は京都市街の十夜風景です。宏之助さんは最近オノマトペに凝っているのか、ここでも数珠を繰る様子にとろりを使わ

れました。この擬態語に婆の土着性が感じられます。

木の葉雨北へ傾るゝ風に乗り　　みち

木の葉が雨のようにさあーさーと北の方へなだれて降り風に乗ってどんどん降ってくる。「いなびかり北よりすれば北を見る」（橋本多佳子）の句のように、北が言霊です。木の葉は北に降らなくてはいけません。

一句鑑賞　　光　みち

頬と脚黄金の光り秋の色（救世観音像）（原句）　　高志

高志さんはこの秋夢殿の参拝をしたのです。私も参拝しました。八角の夢殿を囲み長蛇の列。救世観音と対面する一角は真南に面し秋の日がわずかに差し込み、その奥は暗闇。二、三分すると眼が慣れてきて救世観音のお姿が現れた。外の光を反射してか、想像以上に眩しく黄金の光りである。写真のイメージでは煤けて全体黒々として古ぼけているように見えたのに。被いの布の外されたばかりのような黄金色であり、殊に頬と脚は眩しかった。掲句は秋の色ですが、私は憚りながら下五を「豊の秋」にすれば国宝のこのみ仏に適っていると思います。

一句鑑賞　　増田陽一

払暁のオリオン発し星流る　　高志

冬初めのあまり高くない夜明け前のオリオン座か、更にそのあたりから星が流れたというところ、さぞ冴えた眺めであったろう。「払暁のオリオン」に朝寝坊の僕などは憧れるばかりである。

女湯に声して千住ばせをの忌　　幸一

「千住といふ所にて舟を上れば・・」と、『奥の細道』で早くも遠くに来たような感慨にふける芭蕉が連想され、その銭湯に、特に女声がするというのが秀逸で、何だか下町の情緒もあって流石と思う。

木の葉降るブリキの屋根の鶏小屋に　　みち

「ブリキの屋根」の鶏小屋では落葉の音が響いて鶏も落ち着かぬか。一寸郊外に出ると良くありそうなす光景が「ブリキ」へ着目で印象的に詠まれている。

裏庭に日の廻りきて枇杷の花　　正美

日陰にあってはそれと判らないような目立たない枇杷の花。密かに咲いている花に午後の日が当たるようになって、ああ枇杷がもう咲いているなと気づくのである。「日の廻りきて」にひと日の生活の経過がそれもひそやかに過ぎて行く感慨がある。

散りまがふ木の葉浴びつつ観覧車　　昭七

散りまがふ、は「紛う」か、多くの種類の木の葉が混じって見分けが付かないような盛んな降り方であろう。多彩な木の葉降る中を溯って廻る観覧車が極めて印象的。「まがふ」「浴びつつ」の語法が優れていると思う。

肩に降る木の葉がかさと古書店街　　孝三

降る木の葉と古書店街に積み重なった古書の香りが同

調し、木の葉は乾いた音がして肩に触れ、過ぎし日を語りかける如くである。

一句鑑賞　　飯田孝三

飛び石をゆつくり渡る石蕗の花　　敦子

名苑でも公園でもいい、万般の石蕗の景色を一句に凝縮させ、瞭然。紛れない初端「飛び石」の手柄である。「ゆつくり」とが花の気息に通い、一歩々々、来し方の月日を諾うかの如くに自若。印象鮮明、胸懐の深い句である。「飛び石」の送りは渡る足取りを見せて面白い。

旋風木の葉取り込むビルの下　　みち

旋風に木の葉揉まれるビルの一角か、それとも団地の縁か。「取り込む」は思わず口をついた言葉だろう。身辺只今の景をすっぽり取り込み、木の葉本然の姿を目に見せる。「取り込む」の擬人詠が人の息づきを通わせて明るい。終りの「下」の指定がいい。狭ならず、莫ならずその一角が手にとれるのである。

かけのぼる木の葉もありて尾道は　　興正

尾道は石段の多い坂の町。いわずもがな夙に文人作家に縁、今では屈指の観光どころ。「かけのぼる」の発見が町の甍越しに船を浮かべる瀬戸の日和を引き寄せて明るい。倒置の終「尾道は」は、先だつ〜「も」の軽やかな調べと相剰り、木の葉ころげる足元から視野を転じて、つくづく四囲を見はるかす。「かけのぼる」の用辞も行き届く。

女湯に声して千住ばせをの忌　　幸一

銭湯はどこでもめっきり減った。が、中には営業の工夫で客を集めているところもある。千住もその一所。さて千住は、言わずと「細道」ゆかりの宿場。「芭蕉」「千住」「女湯」と連ねると鼻につきそうだが、さらりと抜けて手練。一点、紅を添えるあたりが又心憎い。

晩節の身辺整理小六月　　宏之助

身に詰まされる一句。核家族社会の行きつくところか。どこそこの土蔵で古文書を発見なんてこともそろそろなくなる。「断捨離」なる聞きつけぬ語が流行る。一家伝来の秘宝は知らず、秘伝書、稀覯本その他愛着のあれこれ、我楽多諸共に廃品処理、時にはお金をかけてさえ業者に丸投げ。晩年ならぬ「晩節」が臍。いやはや孫子の迷惑を忖度しての処世のいや辞世の努めとか。とどのつまりの「ころくがつ」の屈託ない調べが、無心に俳諧を奏でて健気。

手袋に赤を選びぬ誕生日　　紀子

青蜜柑一つ供へて馬の墓　　〃

（前句）「赤」は若い人だけのものではない。熟年ならではの彩映えも。ただし選び方は人さまざま、一点手袋に選ぶその心延えが句のさわり。〜「に」のさりげなさがいい。（後句）こちらは「青」。行き倒れて輓馬は道端や川縁に捨てられたり埋められたり。そこに馬頭観音・

馬頭神が立てられ今に残る。馬の「墓」の標である。「青」は齢の盛り。その昔鞭打たれては汗みづくで働かされつづけた輓馬、駄馬たちの姿が目に浮かんでならない。

裏庭に日の廻りきて枇杷の花　正美

枇杷は地味な花。普通家の前面には植えない。庭は裏寄りの一角によく見かける。短日の陽が西に廻り、大ぶりの葉の混み合いに犇めく花鉾に差し込む。静かに花を掲げる枇杷の佇まいが目に染みる。～日が「廻りきて」がうまい。時の移ろいを見せ、いつしか過ぎ去った年月にふっと思いを通わせるかのようだ。

一句鑑賞　武者昭七

田仕舞の煙の中に立ち尽くす　宏之助

「田仕舞」は一年の農作業を終えて田の神に感謝をささげる行事。積み上げた稲がらに火を放ち立ち昇る白い煙の中に立ち尽くす農夫。大型農法が普及した現在ではめったに見られぬ光景だけに懐かしくも優しい光景である。

病んで聴くラジオの枯葉胸に散る　健二

病床に伏して聞くラジオから流れ出るのは名曲「枯葉」。折から落葉の季節。「枯葉が胸に散る」とは言い得て妙。

女らと居りてもひとり木の葉道　紀子

にぎやかな語らいの場にいても、ふとなにか自分だけが場違いななかにいるように感じてさびしさが胸をよぎる一瞬があるものだ。

神の留守巫女出て道を教えくれ　幸一

十月は神無月。神さまがそろって出雲にご出張。留守を守るのは巫女さんの役目。素敵な巫女さんがにこやかに道をおしえてくれた。こころあたたまる一日。

老年の果ての幼年昼の虫　陽一

老年のはてに行きついたのは幼年時代。時間は循環する。人生の重みがずしりとくる。

ゴッホ展吟行句会（11／30　東京文化会館にて）　高志記

この日前日の小春から一転して寒い朝、十時には駅公園口を出て東京文化会館前の楠の許に着いた。誰も待って居なかったが、しばらくして敦子さん孝三さんが現れ四人となる。他の人を待ったが来ないので、都美術館に向かう。ゴッホ展は人気があって昼前には行列が出来るとITで調べてきたが、寒いお陰でスムースに入場できた。こい乃さんに入口の所で会い、敬司さんはすでに中で観ていると知って六人となる。六十五歳以上は千円、オンラインチケットはもっと安くなるともぎり嬢から教えてもらったが、こちらは前売り券千三百円をもって居たのでそれで入場。いきなり花魁の絵に出会う。ずらりとゴッホの絵画が並んでいると思いきや、ゴッホに関連する浮世絵や広重の東海道五拾参次、北斎の富嶽百景などが展示してあり、私にはそれが邪魔であった。これは浮世絵を見て、日本を夢見て、それをゴッホが作り上げたユ

ートピアにしたらしい、それをジャポニズムといい、彼の絵に影響を与えたという流れで展示したためらしい。見たかった麦畑や向日葵、星月夜、それに耳を覆った自画像はなかった。昔渋谷のブンカムラでのゴッホ展では展示されていた覚えがある。それをもう一度見たいと意気込んで出かけてきたのにそこは残念であった。ゴッホはアルルに移って死ぬまで一年足らずの間にあれだけの作品を残した。それも気が狂う発作が来ない合間に描いたのだ。いつ来るかわからない発作にいつも緊張を強いられたのだ。そして弟に手紙をなんでもかんでも書いて送った。それを読めば絵に描かれた精神がよく判るとか。手紙に書かゝなかったことは絵に描いたとか。アルルでの絵の筆触といういわゆるタッチが寸断されて短いのは早描きのため、渦巻くタッチは、揺れ動く心理を表しているのか。興正さんの句「ゴッホの叫び」を反映しているのか、見る者を驚かす。これがゴッホの個性を作っている。これが己の個性と闘って得た普遍的なものではなかろうか。己に甘えていたらこんな絵は描けまい。こういう芸術家の己を克服する努力、ゴッホに於いては特異であるが、我々の文芸でも出来る筈である。そう思って俳句を作り考える事はやはり楽しいことであると句会の席でも思ったことです。句会では宏之助さんが加わり七人、三十五句の出句を選び選評した。群盲象を撫でる感は否めないのは承知して居ります。

光成高志

種まく人のそびらに大き黄の冬日
冬波の白の浮き立つゴッホの絵
真っすぐな線は苦手か冬の馬車
筆触の無限ゴッホの冬の草
ファン・ゴッホ此処の銀杏黄葉いかに

釜田敬司

原色のゴッホの絵画風邪心地
螺鈿のごと重ねし絵の具冬灯
芳名録茂吉夫妻の文字冴ゆる（ガシュ邸）
シャポンへの憧れのせて雪景色
復元の絵にいつわりの冬日かな（ゴッホ「水夫と恋人」）

光みち

陰影のなき寝室の絵冬ぬくし
青色の強き自画像冬来る
枯岸の運河に集ふ洗濯女
果物の前に手袋ゴッホの絵
着ふくれて観る花魁のゴッホ展

杉本こい乃

銀杏黄葉上野の森の主なるか
初時雨片耳覆ふゴッホの絵
ゴッホ展明日より師走あめ横に
はね橋へもつれゆくなり秋あかね
独り寝の母癒さんと蒲団干す

何処にある鴉のねぐら銀杏落葉
鳩歩く上野の山に木の葉舞ふ
冬館浮世絵ありてゴッホの絵
柔らかしゴッホの筆や小春かな
お喋りとゴッホの絵を見冬ぬくし

田宮敦子

銀杏黄葉ゴッホの夢のその国の
ゴッホの絵ここに集まる銀杏黄葉
黄落の中「跳ね橋」も「麦畑」も
初冬の雨となりたるゴッホ展
ゴッホ展の空鳴きわたる冬鴉

飯田孝三

北斎展出ればしぐれの来たりけり
凩やアダムの男しなだれて
しぐるるやゴッホ北斎梯子して
街路樹のとある日落葉しつくして
冬枯れの上野の森に浮浪して

佐藤宏之助

俳窓評論纂

＊ひろし先生の「富士山百句」抽出続き。
冨士講の古道伝ひて茸狩
雲に手が届くよ富士の茸狩
富士山の標高二千茸狩
茸狩富士に天狗の庭があり
富士樹海茸覆ひてさるをがせ
茸狩われは樹海の深海魚
茸狩五感研がねば方位失す
富士高嶺黄葉前線駈け下る
台風過富士は山肌赭き山
雪富士の今朝また雪の新たなる
北窓を塞がず北に富士ありて
雪煙宝永火口大捲れ
寒旱富士の白道電光形
肩口に金星爛と雪の富士

抜けば切りがない。皆手を打って納得する。さるをがせは漢字で猿麻枠と書く。一人で富士山の茸狩をしている作者はまるで求道者の姿ですね。選評する己を恥ずかしいと思わせる句集です。私の家からも遠く富士山を望める。これがどんなにか毎日の生活に励みになることか。今月号にも11.23の富士山を表紙に載せ祝意を表します。

＊朝日うたをよむ　忘れられた明治俳句　秋尾敏の正岡子規以外の明治期の面白い俳人の句を紹介している。弾かれてあゆむやうなり水馬（岩波基殘）蝸牛そなたの家も小さいな（田辺機一）工兵は架橋に忙し天つ雁（服部耕雨）繭臭き梅雨の旅籠の枕かな（〃）繭は枕の香の比喩とも読めるが実感があり、梅雨とともに季語として働いている。今と違って、季語の本意と生活実感とが結びついた

幸せな時代なのである。ここに、季語は約束か実感かなどという不毛の対立はない。その二つが共存するところに一句が成立している。

＊懐かしい吉野高代さんからご自身の句集「実梅」が送られてきた。以前私の吟行句会にもお出でになり「大手門入り朴若葉楠若葉」（H24）「明石町残る木の家落葉降る」（〃）など投句された。その時体調を崩しておられ、治ったら連絡しますと仰って別れました。この度句集を上梓されまことに目出度く紹介したきこと多々ありますが、一部抽出した句を並べます。

涼しさや造り酒屋の通し土間
霜晴や水の張りたる樽二つ
畝たて機ぺんぺん草も起しけり
生麩買ひ砂町銀座暮早し
泥葱の置かれてをりし厨口
去りがたし鳰浮きくるを見てをれば
普門院のメタセコイアの冬木かな
初筑波四十階の句会場
探梅の吉川英治記念館
雛飾る骨董店に雨やどり
主無き愚陀佛庵の蚊に刺さる
七十や草引く時は膝ついて
爽やかや串田孫一随筆集
冬の海見えし蓬春記念館
石蕗咲いて日ごと短き日の光
雪吊もビルも揺らいで春の池

など旅吟も多く高代さんお元気なご様子です。棚山波郎主宰の「春耕」に写生俳句を勉強したく入会されたとか、私の作句法と似ており、私は好感を持っておりました。皆川盤水句集も読んでおります。余裕があれば東京吟行句会を案内しますのでお出で下さいませ。

＊11.5の朝日に俳壇・歌壇選者８人で巻いた歌仙が大きく載った。

戦さあるなと起きて花野を歩くなり　兜太
雁渡るあゝいつか来た道　和宏
波頭崩れ月影戻りきし　汀子
遠来の友と酌むにごり酒　幸綱
墓石は酒樽の形雲の峰　章
藤井四段リュックをおろす　公彦

以上が初折の表６句である。捌きは長谷川櫂。三か月かけてメールとファックスでやりとりしたとある。大岡信の『うたげと弧心』では、個人で深く作るのと、集まって互に刺激しあう、日本文学は片方ではダメと言っているとか。歌仙では主体を入れ替えることができる。主体の転換こそ詩歌すべての原点だと思います、と櫂が結んでいる。

＊宏之助さんから「麻」に長年掲載されてある同編集長の松浦敬親氏の「芭蕉革命」―芭蕉キリシタン類族説へ

の道Ⅰを読めと俳誌とともに預けられた。2013.10、2017.8、2017.10の三冊を読んだ。いずれも埋木の法則という第二副題がついている。非常に読みにくい論文であるが、よく読むとそうかなあと思わせるところがある。著者はどうも芭蕉が隠れキリシタンであったということを証明したいらしい。最初の4年前のは六義園の縁起を縷々述べてある。引用されている文献が実に多い。千載和歌集、古今和歌集、日本書紀、創世記、ヨハネの福音書、聖書、竹生島縁起など縦横に蘊蓄を傾けた文である。後の二冊も博覧強記の人と言うべき論を展開している。芭蕉、杉風、曾良の書簡から解釈しているので、説得性が増している。琵琶湖がイスラエルのガリヤ湖のアナロジーであるとして、イエスキリストの再臨の地と考えていたのに、六義園は柳沢吉保の私邸になり、国家事業としての六義園でなくなり、キリシタン類族は類族のままになる。「いざさらば雪見にころぶ所迄」（芭蕉）がころぶという改宗する覚悟をしていたのだったが、そうはならなかったので、（ここがどうしてかよくわからないが）自分の考えは心中に秘めておきましょうという情況になり、かろみを云ってもだれも味方になってくれる門人も少なく、却って害になるかもしれないので、無関心を装っております、という去来宛書簡を解釈している。かろみはこのような事情でとなえることになった。これがかろみの深層であると。最新の十月号では、「大津絵の筆のはじめは何仏」（元禄四年正月四日）この四日の四が三光出現の黙示説に関わっているとか、野ざらし紀行に出たのもこの三光出現の黙示に従い家康の生母於大の祥月命日に合わせて決起したのだという。堀田正俊の暗殺もその流れにあったという。何仏は十三仏のどれかである。その場所は大津の三井寺だ。その一番目の不動明王は目黒不動・目白不動・目赤不動とどれも目と色が付く。目も色も光に関係し、イエスにつながるとして、その証拠に『ヨハネによる福音書』を引用して例証している。要は神が主で仏が従うと考える神本仏迹説に従い三井寺の弥勒菩薩はイエス・キリストだとする。それを芭蕉も信じていたので、三井寺の末寺である義仲寺に拠ったのだとする。大津絵の仏は弥勒菩薩であり、キリストの再臨を伝えかったのだとする。（私のこの纂文ではわからないと思います。このような芭蕉を矮小化する文士が今も散見されます。芭蕉が深川に隠棲したのは甥の桃印と寿貞の駆け落ちが原因で桃印を死んだことにして五年毎の帰国の藩法を逃れたというのも同工異曲である。鷗外が食べた料理を詮索する本が流通しているなど文芸とはほとんど無関係な俗悪なる興味が商魂に載って書かれたりするのも同じである。自分の蘊蓄でもって歴史上の人間を規定したって、その作品の瑕瑾にはなるまいに。そういうふうに歴史を見るという事は本当の自分の姿を恰も鏡を見る如く見るという事です。つまり芭蕉の心を想像することではなく、恣意的に実証的に作り上げているに過ぎない。一つの研究ではあるが、歴史とは似て非なるものです。）

＊木村貞惠さんの句集「山川草木」がひろし先生から送られてきた。著者は今ホスピス暮らしとなっているからである。序文をひろし先生が書かれておられる。観世音、霜月祭、尉鶲、御開帳、向日葵という章立ての通り、茶農家の身辺の自然詠を主体に吟行句からの句を選ばれている。山川草木を全て見るということに徹した眼の作家であると書かれてある。誓子先生も眼の作家として有名である。少し抜くと左の通りである。

物置の引戸の重し朧月
わが行けばどつと零るる芋の露
椪の実干す庭中に椪臭
大焚火囲む前向き後向き
蓑の色して鬼の子の首出せり
蕗の葉に音して雨の降り始む
電柱の影が日時計冬至畑
炎天下茶の消毒の厚マスク
枯葉持し金縷梅の花咲き満てり
蜂止まり穂先地に着く赤のまま
並び来て瀬に二分れ流し雛
麹寝す羽毛布団をかぶせ足し
畝の端鍬立て置けば尉鶲
破れ傘破れし縁に霧雫
膨らみし蜘蛛の太鼓の名動く
かまきりの貌なり烏瓜の種
ホームレス朝餉の椀に飛花落花
紅葉且散る縄文の住居跡

など写生句が続きます。この後は来月に回します。生活の中で実際にものを見て作っているので、読む者にも実感が伝わり、心がすっきり晴れやかになります。季語というものは自然のものですからやはり偉大ですね。人間がいくら知恵を働かせても自然に敵いません。どうせ向うさんの方が偉いのだから、我々人間はどうでもいいじゃあないのと云えます。それを貞惠さんの句が暗に教えてくれていると思いました。

＊11.26の朝日の科学の扉欄に注目した。本誌は俳誌だけれども、宇宙論は仏教、文学にも反映しているのでここで取り上げた。我々の体は無論、宇宙を形づくる物質はいずれ消滅するという陽子崩壊の現象を確かめる研究が日米で行われているというものだ。ニュートリノという素粒子を観測したという飛騨市の巨大水槽をもっとでかくした水槽を五百億円以上の建設費をつぎ込んで造り、これでもって陽子崩壊に伴って生じる光をつかもうという目論見だ。この水槽では二人の研究者がすでにノーベル賞をもらっている。ノーベル賞のために巨費を使うのではなく、宇宙哲学を観測によって実証しようとする壮大な研究と考えれば人類のためだと納得できるでしょう。

＊10.2の自我の破れ目から（大峯あきら）の詩的言語と生活言語との違いを芭蕉の句を取り上げて述べている。〈さ

まざまの事おもひ出す桜かな〉〈六月や峰に雲置く嵐山〉〈ほろほろと山吹ちるか滝の音〉これは芭蕉が言っている言葉ではない。芭蕉の言葉の中で桜や嵐山の夏雲や山吹が自分自身のことを語っている言葉だという。だからこれらの句に感動する人は、言葉が、物に対して人間が外から貼りつけた記号やレッテルなのではなく、物そのものを生み出していることに驚いているのである。「松の事は松に習へ、竹の事は竹に習へ」というのは、芭蕉の個人的な東洋趣味というようなものではない。洋の古今を貫く詩的言語の本質への途を告げているのである。人間の言葉より先に人間に呼びかける宇宙の言葉がある。その言葉を聞いたら、人間の自我は破れ、その破れ目から本来の言葉が出て来る。それを詩という名で呼ぶのである。氏はこんな堂々たることを述べる人であった。

受贈誌（H 29年11月号）

鴨の陣水脈の余波にて大うねり（彩137号）　平野ひろし
ただ冷た小泉八雲掛けし椅子（〃）　〃
紅葉せり松千本に囲まれて（〃）　〃
七節虫のパンタグラフの脚拡げぐ（〃）　小泉博
赤蕪干されて見沼晴れにけり（東京ク11月）　理佳江
桑枯れて秩父嵐を真向ひに（〃）　〃
鉄塔を登りきらずに蔦枯るる（〃）　守啓
旱魃と飢餓の国あり十一月（〃）　璃子
桟橋へ続く大道黄落期（〃）　文男
透き通る弁天池に鴨来たる（〃）　万世遊
秋立つや馬頭観音大板碑（あすか十一月）　山尾かづひろ

こだま

山尾かづひろ吟行ノート（H 29・11.3）
ひもろぎの鳩に餌やる神の留守　飯田孝三
将門の見得切る舞台神の留守　光　みち
神無月皇帝ダリア花かゞげ　光成高志

賢治詩「薤露青」（春と修羅・第二集）の明るさ

武者昭七

詩の前半は溢れんばかりの夜の大河とそこに浮かんだみおつくしへの次のような呼びかけからはじまります。

〈みをつくしの列をなつかしくうかべ　薤露青の聖らかな空明のなかをたえずさびしく湧き鳴りながら　よもすがら南十字へながれる水よ〉　作者はさらに水に向かって呼びかけます。

〈水よわたくしの胸いっぱいの　やり場所のないかなしさを　はるかなマジュランの星雲へとどけてくれ〉

そこは赤いいさりびがゆらぎ　蠍がうす雲の上を這うこの世ならぬ世界です。作者のいう「・・たえず企画したえずかなしみ　たえず窮乏をつづけながら　どこまでもながれていくもの・・」とは誰のことでしょう。ぼく

は「雁の童子」の親子の会話を思い出します。「水は夜でも流れるのですか」という童子の問に老人は答えます。「水」は夜でも流れるよ。水は夜でも昼でも、たいらなところでさえなかったら、いつまでもいつまでも流れるのだ。」絶えず流れてやまぬ水。それは途絶えることのないいのちのしるしです。夜の大河に浮かんだ「みをつくし」とはぼくらのいのちなのです。それは絶えず流れ続け途絶えることのないことを作者はかたっているのです。後半は作者が偶然トシの声に出会う場面です。

〈声のいい製糸場の工女たちが　わたくしをあざけるように歌っていけばそのなかにわたくしの亡くなったいもうとの声が　たしかに二つも入ってゐる　・・あの力いっぱいに細いのどから歌う女の声だ・・〉

わたしを「あざけるように聞こえる」のは作者の気弱さを工女がとがめていると感じるからでしょう。「兄さんいつまで悲しんでいるの」と。

空は灰色の鋼をのべたように開け、水は銀河の投影のようにはるかな地平線まで流れ、黒い鳥の群れは叫びながら空をきります。杉林のあたりがあかるみ月の出を知らせます。いのちのゆらぎだす気配があたりに満ちてきます。そんななかで作者はこんなふうに思うのです。〈・・ああ、いとしくおもふものが　そのままどこへ行ってしまったかわからないことが　なんといふいいことだろう、、〉「どこへいってしまったかわからぬ」とは当人の「不在」を意味します。「不在」と「非在」とは違います。不在とはそこにあったものがどこかへ行ってしまってそこにはいないことを意味します。だからまた舞い戻ってくることが前提です。非在は最初から存在しないことです。トシは賢治と死後もつねに一緒でした。賢治はあるときは弥勒菩薩の浄土に、あるときは林の中の白い鳥に、あるときは噴火湾の雲の中にトシを感じ続け見続けてきたのです。トシはいつも賢治のそばにいたのです。そして今元気な工女の声の中にいるのです。あらゆるところにトシはゐるのです。「偏在」するのです。「どこへ行ったかわからぬ」ということは逆説めいた言い方になりますが、どこにでもいる、ということです。（宗教家は逆説が好きです。）「なんといふいいこと」という言い方に詩の前半に見られなかった安堵感がかんじられます。月の出、しきりに騒ぐ鳥たち、空にかかる秋の鮎のさび模様、水の流れにしのびよるかなしさの影で詩は閉じられます。

「薤露」とはラッキョウの葉の上に降りた露の意味でいのちのはかなさにたとえられます。中国で貴人の葬送などにうたわれました。賢治はそれに涼やかさを添えて「青」を置いたのでしょう。この詩は書き損じの原稿用紙の裏に鉛筆書きされ、さらに消しゴムで消されていたのを研究者たちの努力で復元されたものといいます。

芭蕉のかるみ以後（38）

光成高志

鰥（ホチ）々として寐ぬ夜ねぬ月　　角

鰥々は魚が水のなかでも目をあいていることから憂いの為眠れない様をいうと漢和辞典にある。クワン〳〵と音読みするのをホチ〳〵と仮名を振って読ますのは基角の新造語か長野の方言かと高藤竹馬氏は推測されているが違うと思う。昭七さんに頂いた江戸語辞典によれば、いい中の男女がひそひそ話をする声とあり、吉原語であるとある。吉原でいい中になった男女がひそひそと話しながら夜も寝ないで月見をしている如く私も世に拾われぬ虚栗に執着して犬もくらはぬ俳諧に夜も寝ないで身をやつしている、というのである。ここまでの気合のこもった両吟のやりとりが今に伝わってくる。

婿入の近づくまゝに初砧　　角

ここから二の表に入るので基角が続けて読んで順序を入れ替える。月が出たから秋の砧であしらった。婿がお入りになるので、いそいそと砧を打つ娘の姿が前句の月光の中に映し出されてくる寸法だ。師弟の気合の入ったやり取りから、初秋の爽やかな村里の風景に転じて次の芭蕉の付け句も真にうらみなしだ。

たゝかひやんで葛うらみなし　　蕉

葛は風に吹かれてその裏葉が歌に詠まれてきたから、うらみの枕詞になっている。「恋しくば　尋ねきてみよ　和泉なる信太の森のうらみ葛の葉」（葛の葉伝説）の歌を裏に持ち、緊迫したたたかひのような両吟も葛うらみなしと決着した気分。わたしなんか蓮の裏葉のほうが印象深いが、葛の葉伝説を踏まえているので、葛うらみなしとなったのだ。

嘲（アザケ）リニ黄金ハ鋳（ル）小柴（ヲ）　　角

当時の錦繡段の詩句に「若シ呉ヲ破ル功ノ第一ヲ論ゼバ、黄金ハ只西施ヲ鋳ルベシ」を踏まえる。これは呉王夫差が西施の容色におぼれて戦に敗れた故事を吉原での遊女小柴をめぐる恋の争いに取りなした。小柴というのは、玉の輿よりも真実の愛のために自害した遊女であって、相手の白井権八と合わせて権八小柴と云って歌舞伎、浄瑠璃、音曲中に取り入れられた。寛文・延宝のころ、もと鳥取藩士平井権八が同藩の本庄助太夫を討ち、江戸へ出て吉原の遊女三浦屋小柴となじみ、金に詰まって辻斬りをはたらき、延宝七年鈴ヶ森で処刑され、小柴も後を追って自害したという実話による。安永八年初世河竹新七作の『江戸名所縁曽我』が最初といわれ、その後も多くの作に白井権八の名で登場する。また、史実では年代が異なり交際のなかったはずの侠客幡随院長兵衛が絡む筋の多いのが特色である。『鈴ヶ森』の原作『幡随長兵衛精進俎板』（初世桜田治助作一八〇三）と『浮世柄比翼稲妻』（四世鶴屋南北一八二三）など現在でも語り伝えられている。私は目黒不動尊にお参りした時、権八・小柴の比翼塚を見た覚えがある。恋のたたかひやんでというものの大尽の心は釈然としないものがあり、いつまでもぐずぐず悩んでいる気持を自ら嘲って、小柴の姿を黄金に鋳てひとり慰めているのだ。だって呉を破った第一の功績はその容色でもって呉王を溺れさせた西施にあり西施を黄金にかたどった鋳物にするべしとい

うのである。金のインゴットよりどんなにかましであろうに、とか現代なら云うところ。戦国の世の余韻がまだ残っているこの時代を想像するとこうなる。

お便り広場（到着順、敬称略）

「富士山百句」の御礼有り難うございました。今月の御句「木曽谷や稲架に小蓑の青シート」は写真のような情景でしょうか。これは伊那の大鹿村という所です。二、三年來手足が痺れて難儀しています。大兄もお体を大切にご清吟なされんことを祈念しております。簡単ながら先ずは御礼申し上げます。（11.2 平野ひろし）

（そうです。手足の痺れ、以前九段坂病院で入院生活をした時、後縦靭帯骨化症という難病の方が多く手術され治って退院されました。首の後ろの神経圧迫で手が痺れるそうです。今思い出したものですから、参考までにここに書きました。高志）

凩一号の後初冬の気配が濃くなって来ました。気がついたら、欅の葉が木によってはかなり黄にアメリカ花水木の葉も赤く小さな実も点々とついて、目にする緑すべてが色変りしていました。銀杏もきれいな黄になっています。白金葭十月号ありがとうございます。まだ鶫を目にしていませんが、私の庭にもチョイく来ます。椋鳥よりは少し大きいように思います。カスミ網で大量に命を失った悲しい鳥なのですね。昭和五十六年初版の「東京の野鳥」の写真はまさにみちさんの御句のペンギン立ちです。野の鳥が見られる所に住むのはお互い様に嬉しいことゝ思っております。浅野正美様の「鶫群れ飛び来て留まる電線に」の有様は見たことありません。この様子は私共の辺りでは、ムクドリです。物凄く貪欲です。声も頂けない声で死んだ赤ちゃん鳥も口端長くカワイイ顔ではありませんでした。話は飛びますが、我孫子日記、高志様の御句の体育祭で昔の運動会を思い出しました。スポーツぎらいで大きらいな運動会で徒競走などビリでしたが、昔は一等になるとその子に先生が旗を立てて駆け寄り賞状や賞品を出すところへ連れて行き、子はほこらかに受けとり、二等三頭等皆これに準じたもので、ビリでもお帳面とか鉛筆が出ていました。子も孫も縁がありませんが聞くところによると今は賞品などなしだそうです。ケンネル、ご教示ありがとうございました。二〇一七年すでに二か月しかありません。表紙の白金葭のようにしっかりと正統をお守りください。「祝富士山百句」の富士山は明けか暮れか、いずれにしてもやさしい富士山ですね。ご無理をなさいませんよう、八十一号楽しみに。十一月二日　長屋璃子

（いつもうれしい素晴らしい手紙ありがとうございます。感想は書かないようにしていますが、ついついキーインしていると心が伝わって来て、九ポで追記しました。鶫の電線には句会の時、椋鳥ということで正美さん納得されました。原句をそのまま掲載しています。

富士山の写真は先のは台風過、今月は23日の朝、我家から見える雪富士です。左に細くスカイツリーも見えます。高志〉

どこへ行っても落葉が舞っていますね。この間はほんとうに色々お世話になりました。二人の心くばりに心から感謝します。私は疲れて何日もぼおーとしていました。もう俳句も出来写真も出来私の行動のなさを思い、二人の日頃からの生活にビックリです。私も年令のせいにせず少し努力して見ようと思います。高志さん少しやせて居たので心配しましたがくれぐれもお体に気をつけてがんばって下さいませ。又手紙出します。敏子さん気をつけて下さいませ。

添付記事：天風録（10.20）〈飲まない日はさみし〉酒をこよなく愛した防府市出身の種田山頭火による日記の一節だ。防府天満宮近くに開館した「山頭火ふるさと館」のことを防府市民が「お帰り」の気持を込めて建てたそうだ。〈ほろほろ酔うて木の葉ふる〉（11.10　幸子）

鎌倉錢洗辨財天宇賀福神社に行ってきました。こちらヘルパーでのオムツ替えの日々で右肘と腰痛ですが介護の仕事は責任が重く休めないので、メンテナンスしながらがんばっています。お父様お母様も寒くなるので風邪に気をつけてお過ごしください。

観覧車彼の心を覗き見る（草太）（11.12　晶子）

レオナルドダヴィンチとアンギアーリの戦い展　十月十七日県立美術館に行きました。帰りすぐ手紙書くつもりがごたごたしていましたので書けませんでした。福山から山陽本線でのんびり友達四人でしゃべりながら行きました。一五〇〇年頃の絵画が修復されたイタリアの国宝、五〇〇年の時を越えて並び合うイタリアの美術史に心うばわれました。又レオナルドの生き方というか？医者であり建築家であったと展示してありました。努力の人だったと思います。それを思うと高志さんの努力とかさなるものがありました。お身体大切にしてください。敏子さんこの間は心くばりほんとにありがとうございました。手作りの袋その中のパンほんとうにおいしかったです。ゴマはほんれんそうのごま和えに使いました。お身体に気を付けてゆっくり暮らして下さいませ。（11.15　幸子）

去る六日（月）深更急に高熱を発し人事不省となり救急車で緊急入院、以来病状に就いて今日に至りました。担当医は急性感染症を疑い、各種検査のほか腰椎なども痛むのでＭＲＩ検査なども実施しましたが、脳、体幹部にも異常無く、熱も下がり、明確な病名診断はつかない様子です。然れども私には判っています。倒れた日の日中は柿の実を無理な姿勢で捥ぎ取ったり重い培養土を載せた自転車で坂道を上下したりする自らの肉体の老朽化を無視した無謀な行動を重ねました。そのため己が身が悲鳴を上げ、就床後丑三つ刻に物の怪と共に反旗を翻したというわけなのです。どうやら体は一日と平穏に治りつつありますが、十一月例会は止む無く欠席になります

ので宜しくお願い致します。別紙にて投句を同封いたしますので、句会でご披露頂ければ幸いです。どうぞ宜しくお願い申し上げます。

（11.15 癌にて　健二）

十一月もバタくと忙しい日が続き、いまのところ比較的あたゝかで、何をするにも楽ですが、霜が降りたり冬はこれからですね。十一月の句会は戸越銀座の商店街を一寸入った所でしたが、どこの家の前に何かしら植物を植えているのは同じですが、とても可愛らしい丸い実を見つけ皆気にしていましたが、句友の一人がオキナワスズメウリであると教えて下さいました。嬉しい発見でした。遠くへ行かずとも家から出れば何かの発見もあるものですね。毎度申し上げますが、健康第一に。

光成様　　長屋璃子（11.13）

追伸：この十二月で以て御誌購読料誌代切れとなります。平成三十年よりの誌代ご教示下さい。

（仰る通りです。よろしくお願いします。みち）

いつもお世話様です。ご連絡が遅くなり申し訳ありません。通院日と重なり変更できませんので、十一月例会欠席させていただきます。

（11.16　浅野正美）

前略返事遅れてごめんなさい。写真　俳句ありがとうございました。一緒に歩いた所なので分かりやすく思いました。良かったです。奈良法隆寺の旅の機会を得られたこと、心から嬉しく感謝しています。一生の思い出となりました。兄さん達のこと自慢してしまいました。帰って本屋さんに二日間続けて行き、法隆寺の復習をして心に国宝百済観音、救世観音心にしまいました。孫たちにも　兄さんとの話しを伝えました。自慢しまくりです。私達兄弟はさみしい思いが心にあるのですね。だからすごく人にやさしいです。口では強がりで話しますが、内心とてもさみしくなるのでみんなにやさしいですね。みんなこれからだんだん弱っていくかと思いますが、すてきなジィジ、ババになろうね。かわいいジィジババになるよう笑顔で一日一日過ごして行きたいと思っています。兄さん達もいつまでも元気で長生きして下さいね。これから寒くなるばかりです。体に気をつけてね。心より祈っています。この度はほんとにありがとうございました。

（11.14 峯子）

先日の十月例会ではお世話になりました。お手数をかけますが、駄文一句鑑賞をお届けします。何卒よろしくお願いします。急に冷え込んできました。お二人呉々もご自愛の上ご清吟の程を祈りあげます。

（11.22 孝三）

何時もお世話になっております。小生、脚の手術から漸く四カ月、何とか以前よりは歩行も少し楽になりました。先日、乃木坂でやっている安藤忠雄展を見て感動しました。氏の建築には何か根元的な発想があります。また、「ファーブル昆虫記」の三十年かけた完訳が「菊池寛賞」となった奥本大三郎氏から賞の贈呈式に賑やかしに来いと言って来たので行くともりです。同時受賞が夢枕

獏、岸恵子、浅田真央、と多彩。近況報告まで。（11.24 陽一）

我孫子日記

10/20	例会
10/23	眼医者
10/24	＊　北総病院
10/25	SOA(4)
11/1～11/2	*2　法隆寺
11/7	*3　北総病院
11/8	SOA(5)
11/11	*4　北総病院
11/12	*5　文化祭
11/15	SOA(6)
11/17	例会
11/21～23	＊6　北総病院
11/26	＊7　谷中上野
11/30	ゴッホ展

＊先の強風袴を脱がぬ団栗落ち　高志
病院の大王松の松落葉　〃
*2 法隆寺へ歩けば庭に柘榴はぜ　〃
小春日や火見櫓と松並木　〃
大講堂桜紅葉の四十雀　〃
千円の寄付して出れば四十雀　〃
飛行雲一筋伸びる天高し　〃
穂芒と鏡池あり柿の句碑　〃
秋日和聖徳太子摂政像　〃
丈高き百済観音秋の声　〃
東院へ桜紅葉の築地塀　〃
黄帽子の学童の列小春かな　〃
梅擬紅の粒々空青く　〃
夢殿を巡る列にて澄める秋　〃
頬と脚黄金の光り秋の色（救世観音像）　〃
法隆寺駅から歩く菊日和　みち
斑鳩に今も手刈りの刈田あり　〃
風なくて桜紅葉の法隆寺　〃
開きあり玉虫厨子や神無月　〃
鼻欠けし胡徳楽面小六月　〃
七歳の太子の眼秋澄めり　〃
法華義疏の黒き版木や冬近し　〃
辿り着く茶所に座す小六月　〃
手を伸べらるる百済観音菊日和　〃
小春日や釈迦三尊の公開日　〃
冬の蝶か飛鳥時代の透彫　〃
*3 立冬や待合室に頭が並ぶ　高志
吊るし柿洗濯物と共に掛け　〃
鈴生りの柿の目につく椎の前　〃
*4 ハローイン太極拳は仮装して　〃
*5 文化祭のコーラス元紳士元淑女　〃
*6 山道を抜ければ谷津の刈田かな　〃
冬の日や銀河鉄道精読す　〃
病友は仲良くなつて初時雨　〃
＊7 はらからと桜紅葉の谷中ゆく　〃
陶狸脇に一輪冬薔薇　〃
芸術の散歩道あり落葉敷く　〃
子規球場銀杏の時雨激しかり　〃
公園を囲むかに列美術展　〃
塀の内いろは紅葉の真赤なり　〃

編集後記

今月は病院通いの合間にあちこち出歩いた。初めが畑の竹の支柱に撥ねられて角膜を傷つけ眼医者にかかった。病院は内科と泌尿器科を梯子して未だにおさらばできないでいる。去年行けなかった法隆寺夢殿の救世観音を拝めたのが今年の最大の収穫だった。フェノロサの墓には二回お参りしたのに、夢殿の秘仏のミイラみたいな布を剥がして見せてくれたその御仏像を見ていなかったのだ。二十歳の時に独り法隆寺を参拝したが、開扉はなかったし、去年の修二会参陣の機会に寄ったが見られず、今年五十五年越しの夢がかなった。私は感動して同行の同胞に隣の中宮寺の如意輪観音を案内するのを忘れてしまった。和辻哲郎さんや亀井勝一郎さんのような鑑賞は出来ないが、みちさんが書いてくれたように、意外と光輝いて見えたし、帰って全身写真を毎日見てゐると、膝をやや曲げた、そう、宮本武蔵の歩き方のような自在境にお立ちになっているように見えお美しいと思う。また時間をかけて鑑賞文を書いておきたいと思っている。

それはさておき、師走に入って本誌発行となりましたのは、これも私の発想にてゴッホ展句会を取り込んだためです。原稿をキーインするという作業が歳の所為で少ししんどくなりましたので、電子データ化されたディスクでやり取りできるようにお願いしましたところ、昭七さんが早速応じて下さいました。このような方法で編集に専念できますようにご協力をお願いします。

白金霞 11 月号(通巻第八一号)平成二九年 12 月 5 日発行編集・発行人 光成高志
発行所 二七〇-一一一九 我孫子市南新木一一四一一七
☎・fax 〇四―七一八七―一〇六八
印刷所 (株)ミューズ・コーポレーション喜怒哀楽書房
〒九五〇-〇八〇一 新潟市東区津島屋七-二九
☎ 〇二五(二五〇)九六六六
表紙の題字:加納綾女 同写真は二月二の白金霞&台風過の 10.23 の朝の富士山